

文展の子供の繪と彫刻

倉 橋 生

新聞で承知して、一つの目あてにして來た『ゆふべ』(菊池契月)はやつと第七室にありました。それまでに、一つ位はと思つて氣を氣つけて居ましたが、子供が主題になつて居るものは、第六室まで一つもありませんでした。『琉球所見』(岡田雪窓)に琉球の子供、『憩ひ』(山村大雲)に支那の子供が居ることは居ますけれども、一方は那覇の町を寫し、一方は憩ひの氣分を描くために使はれて居るだけで、別段子供を描かふとされたものではありませんから問題の外に置きます。

評判の『ゆふべ』は、子供を描くとしては、極く面白いつかまへどこがされて居ます。小盥で行水といふことが、既に可愛らしい感じを誘ふではありませんか、裏の井戸の傍の柳の下で盥の中へすはつてお湯をつかつて貰つて居る女の子の體は、

年齢相應の發達をよく描いてあります。殊に小さい乳の邊から軟い肩から頸へかけての邊などは、非常によく出來て居ると思ひました。たゞ此の作に對する私の物足りなさは、全體が餘り靜的に過ぎて居る處です。そこが此の繪を上品にして居る點であると思ひますけれども、觀て居ても物足りません、去年の此の畫伯の『鐵漿蜻蛉』にも、此の靜かな調子で神秘的な子供が描かれて居ましたが、今年の此畫では、もう少しは動いて貰ひ度いと思ひます。盥の中の湯が動いて居ません、従つて手拭もぬれて居ません。洗つてやつて居る人、洗はれて居る子、共に餘り靜か過ぎはしませんか。盥の傍のぬか袋を入れた小籠や、ぬぎ棄てた子供の草履の様のものまでも、ちつとも動いて居ないのはどうしたのでせうか。誰れたかは此の女の子

の體を營養不良などと茶かして居ましたが、それは必ずしも左様でありますまい。たゞ餘り靜的なので、折角の子供の繪でありながら、餘り積極性がなさ過ぎて居るのでせう。惜しいこと、少くも私には物足りないことです。

次の室の『紅繪』（福永公美）に一種變つた畫風で紅繪買ふ姉と妹とが描かれ、其の次の室の『青柿の檐』に寢籠に入れられた赤坊と幼い姉とがありますが、もう一つの目あてとして來た『幼どち』（栗原玉葉）へ飛びましょう。

玉葉女史の去年の出品の『さすらひ』は、畫題にふさはしいさびしい心持が、あの畫の全體によくあらはれて居まして、私は見て居るのも胸が苦しくなりましたと其の時にも申しましたが、さびしさは此の人の作に通じての特色だと教へて呉れた人もありました。私は其の説をどこ迄信じてよいか知りませんが、今此の作に對して、成程その言の通りか知らんと思つたのでした。此

の畫の中心の子供は泣いて居ます。笑つて居る畫では素よりありません。しかし、其の泣いて居るのも人形の手が折れたからではありませんか。子供當人には悲しいことでも、見るものには悲しいよりも淋しいよりも、寧ろ可愛らしい一方の感じが起る譯なのです。子供の生活を描いて缺くべからざる此の快活の氣分が、何故斯くちつとも出されて居ないのでせうか。之亦私には至極く物足りないと申さざるを得ません。殊に傍に立つて居る二人の少女の心持が一寸不分明に過ぎます。此の泣いてる子とは全く無關係に、畫面の都合上借りて來たものゝ様な氣さへします。之れが亦どうも物足りません。但し、子供の形はよく描かれて居ます。殊に泣いてる子が最よく描かれて居ます。

今年の日本畫の部で子供が主となつて居るものは、先以て此の二つです。しかも兩方とも、もう一つ陽氣には出來なかつたのでしようか。それにしても去年の祭のよそほひを出品して、子供好き

の足をひきとめた島成園女史の明るい作が無いのは、どうしたのでしよう。

観てゆく順では日本畫の次が彫刻になつて居ます。そうして、私の足は『同盟罷工』(渡邊長男)の前へ立ちました。何たる光景でしょう。勿論彫刻に對する私の鑑識力は繪畫に對するよりも一層しどい素人です。技巧上のことは私には少しも分りません。たゞ自分でも思ひきつて批評的態度を棄てゝかゝつて居ます爲か、彫刻のあるものに對すると、ほんとうに私の心がひきつけられて仕舞ひます。どこ迄もく其の味の深さに自分を忘れて仕舞ひます。『同盟罷工』の前に立つた私は、正直のところそれ程ではありませんが、なか／＼目を放すことが出来なかつたのです。腕を組んで立つて居る父の顔には、暴慢な雇主に對する弱者の最後の手段として同盟罷工には加はつたものゝ、さて斯く妻子に泣きつかれ、泣きすがられて見れば明朝の米をどうしよう、之れから後の行さきを何

としよう。なあにどうかならあ、おれも男だとは言つては見ても、扱て苦しい、せつない心持が凄いやうに出て居ます。其の骨節荒い兩の腕にも出て居ます。但し此の彫刻の技巧によつて出て居るのか、此の題目から呼び起された私の感じか、その區別は私にはよく分りませんが、何しろ、斯ういふ場合の強く弱く、弱く強い男性の心持は此の彫刻の前に佇立して沁々と味ふとが出来ます。母に抱かれて居る子供は勿論、父の足に縋る子供も父母の心が何のことか知つては居ません。其の知らないのが親達には一層苦しいのでしよう。此の彫刻は素より子供が主題になつてゐるのではありません。しかし、此の二人の子供が、觀るものゝ感じの上には寧ろ一番大きい力を持つて居るのかも知れません。此の室の仕舞の方に『のぞき』(建島大夢)があります。鑄銅で可愛らしい少女が出来て居ます。

西洋畫の部には、拾へば子供が澤山居ます。し

かしいづれも、それ／＼の畫趣の中に子供が點せられて居るといふのが多いので、子供といふものに興味を持つて描かれたのは『母の着物』（石川寅治）と『添乳』（赤松麟作）とでしよう。

『母の着物』は題そのものも餘り面白いものじやありません。子供が母親の着物を着た、寸法のあはない可笑し味です。西洋のボンチ繪などによくある、お父さんの外套をひきづり、帽子をぶくつとかぶつて居る滑稽と同じ趣向に屬するものです。無邪氣といへば無邪氣ですが、わざとふざけて居るだけに、それだけ面白味が減じる様氣がします。それに、此の女の子の顔が私には如何にも氣に入りません。眼瞼も頬も口も、なんだか頗る妙です。此の畫伯の描かるゝ女の顔などは、いつも私は好んで見るのですが、此の顔はどうしたことなのでしょう。顔といへば『添乳』の男の子の顔も随分可愛らしくない顔です。『添乳』としては第一、子供の年齢が大き過ぎます。苟も二十世紀

の育児思想の進んだ今日、こんな大きな子に添乳する母親があらませうか。などと例の理屈は暫く抜きにしても、折角の可愛らしい添乳の氣分が少しも出て居ないではありませんか。前の畫も此の畫も繪としては骨も折れ、又立派に出來て居るのでしようが、子供としては揃つて餘り可愛らしくないのです。

* * * * *
去年と較べて、數に於ても實に於ても、子供の繪としては盛でない方です。去年の時も申した様に私の希望は少し偏つて居るかも知れませんが、繪と彫刻と併せて三百二十餘の出品の中に、もう少し立派な、眞な、美しい、『子供』があつてもよさそうに思はれます。雑誌の口繪や、小さいカットなどの外に、子供を子供として描くことを専門とし得意とする美術家が、そろ／＼一人位は出てもよさそうなのですが。